Library

第 37 号
編集・発行
信州大学附属図書館
繊維学部分館
平成12年11月9日

CONTENTS

郷土の俳諧師、一茶ゆかりの地を訪ねて　機能高分子学科　藤本 哲也　(2)

蚕の飼育から考えること　繊維ｼｽﾃﾑ工学科　西岡 孝彦　(5)

分館通信　告知板　(7)

分館日誌　(8)

編集後記　(8)

Library（電子版）はｲﾝﾀｰﾈｯﾄでも提供しています。
URLは http://shinlis2.shinshu-u.ac.jp/seni/online.html です。

郷土の俳諧師、一茶ゆかりの地を訪ねて

機能高分子学科　　藤本　哲也

朝、パソコンのスイッチを入れメールをチェックする。今日も SwetScan から関連論文のタイトルが送られてくる。論文複写を頼もうか迷っているところに学生がやって来てその日の実験の打ち合わせ。一段落した後、Web からダウンロードした論文をマウスでめくる。あふれる情報の中に身を置き忙しく過ぎていく毎日の中で、ふと全く別の世界のことに触れ、凝り固まった頭の中をリフレッシュしたくなる衝動に駆られることがある。そんな時よく父親の書棚を覗いて見る。他人の書棚には自分には無い興味の対象となる書籍が並んでいて、てっとり早くそんな衝動を満たすのに都合がいいのである。いつものように父親の書棚を覗いていたら、立派な装丁の新刊書の陰に隠れた小さな文庫本を見つけた。「一茶」（藤沢周平著、文春文庫）である。一茶とは、

痩蛙まけるな一茶是にあり
やれ打つな蠅が手を摺り足をする

と言った句で有名なあの小林一茶である。一茶は北信濃の柏原（今の黒姫）で生まれ信州にゆかりが深い。私ことながら父親の実家が柏原の六月村にあり、週末を父親の実家で過ごすことが多かったことから、一茶と言う名前は小さな頃から知っていた。一茶自身、江戸から故郷に戻って、

是がまあついの栖（すみか）か雪五尺

と詠んだように北信濃、特に新潟県との県境に位置する柏原は長野県でも有数の豪雪地帯であり、冬、私自身も一晩に1メートルも降り積もった雪を屋根から降ろす雪降ろしという作業に明け暮れた思い出がある。一年の半分近くを雪に閉ざされるこの辺境の地からあれほどの高名な俳諧師がどのように誕生しそして世に出たのか、小さな頃から疑問に感じていた。私は決して俳句を解する風流人ではないが、芭蕉、蕪村らの俳句とは違うあの一茶独特の素朴で何となく滑稽な句のスタイルはどのようにしてできたのかといったことにもまた何となく興味を持っていた。これまで持ち続けてきたそんな疑問、好奇心がその文庫本を手にとった時ふっと蘇り、秋の休日の一日を利用して文庫本片手に一茶ゆかりの地を訪ねてみることとした。

山田温泉、五色、七味温泉で有名な高山温泉郷の入り口近く、りんご畑の中にその名も＜一茶ゆかりの里、一茶館＞がある。一茶の代表作である「父の終焉日記」の原本をはじめ数々の直筆の遺墨が展示されており、また

一茶の生涯や、「父の終焉日記」の内容をわかりやすく映像で知ることができた。

柏原はその昔北国街道の宿場町の一つであり、人の往来も多く江戸や上方の文化が旅人を通じてもたらされていた。1763年一茶はその柏原に農家の子として生まれる。幼くして母を無くした後、継母に育てられるがずいぶんとこの継母にはいじめられ悲しい思いをしたようである。

我と来て遊べや親のない雀

とは、この頃を思い出しての句である。15歳の春、長男でありながら江戸に奉公に出された後の10年間、一茶が江戸でどのようにしていたのかについてははっきりわかっていないようであるが、20歳の頃、当時の俳諧界の一派である葛飾派の俳諧師、大川立砂の元に奉公し、ここで俳諧を勉強したようである。素丸、元夢、竹阿と言った師匠達に師事し、俳諧師として一茶は次第に頭角を現わしていった。当代一流の俳諧師であり富豪の夏目成美らに交わったり、7年に及ぶ西国行脚の旅に出たりして次第に＜一茶調＞と言われる独特な句風が形作られていった。しかし俳諧師といえば聞こえは言いが、実際のところは金に困っては門人達の家々を訪ねて世話になる貧しい生活だったようである。40歳を過ぎても妻子もなく家もない江戸の生活に見切りをつけ、故郷の柏原に戻る決意をする。亡き父の遺言を盾とし、10年にも及ぶ継母と異母兄弟との遺産相続をめぐる争いの後、田畑、屋敷の半分、また倍賞金までも勝ち取り故郷に戻ることとなる。故郷に戻った後も、一茶は俳諧を捨てず特に善光寺以北から越後にかけて約80人の門人を持ち俳諧の指導をしたという。ここ高山村にも多くの門人達がいて一茶自身頻繁に訪れたようである。この一茶館に収められている資料の多くはそういった門人達の家々に代々伝えられてきた一茶の遺墨である。その後52歳で初めて結婚し3人の子供をもうけるが、子供らは次々と亡くなり妻にも先立たれ、やっと勝ち取った人並みの生活を失うこととなる。その後さらに2度再婚をするが、柏原大火のあった65歳の年にその生涯を故郷の地で閉じることとなる。

小説「一茶」を思い出しながら一茶館に展示されていた一茶の年譜をたどり、これまで知らなかった人としての一茶に触れたような気がして感慨深かった。痩蛙のような句が有名であるために、これまでは小動物にも優しい目を向ける子供の様な純粋な心を持つ徘人とだけ思っていたが、決してそれだけではなかった。そういった俳諧師であると同時に、必死に生涯を生き抜いた一人の俗人としての姿も読み取れた。

一茶の名は、すでに江戸時代＜諸国人気俳人番付＞というものに登場していて、ある程度は諸国に知られていたようであるが、本当の名声は明治時代正岡子規による再評価の後にとどろくこととなる。それを契機に一茶研究が活発に行われ今日にいたっている。

高山村をあとにして湯田中に向かった。湯田中にも多くの門人達がいて度々逗留したようである。温泉街の裏山に一茶の散歩道と呼ばれる小道があって、湯田中にゆかりある句が並び頂上付近に一茶堂という小さなお堂が

立っていた。散歩道にしては急な坂道を登らねばならないが、湯田中の温泉街を眼下に見ながら句碑をたどるのも情緒にあふれ楽しかった。

最後に柏原（黒姫）に向かった。おそらく何百回と来ているはずだが、一茶ゆかりの場所を訪れるのは今回初めてだった。国道18号線に沿って町に入るとすぐ右に小林一茶旧宅の史跡がある。柏原大火で家を失った後、焼け残った裏庭の土蔵で生活することとなるが、そのわずか半年後この土蔵で生涯を閉じた一茶終焉の地である。そこから更に500m程駅に向かって走ると右手に小丸山公園という小高い丘がある。公園内には大きな石板に刻まれた句碑が立ち、丘を登りきった見晴らしのいい場所には一茶愛用の硯などの遺品や遺墨が展示されている一茶記念館、さらに奥まった場所に一茶を偲んで建てられた一茶俤（おもかげ）堂がある。木立に囲まれたひっそりとしたその裏手に、一茶のお墓があった。一族のお墓で父親、継母、異母兄弟らも一緒に眠っているという。

一冊の本がきっかけとなったこの小さな旅を通じて、また

門の木も先つつがなし夕涼　（15 年振りに故郷に戻り父親と再会して）

心からしなのの雪に降られけり　（遺産相続で継母らと争い故郷を後にして）

といった心情をずばりと吐露した多くの一茶の句を知り、郷土の俳人一茶に対するこれまでの印象を新たにした。典雅とか気取りのない多くの一茶の句には生身の人間の心情が正直に読み込まれていて、風雅を重んずる芭蕉あるいは蕪村らの句とはかなりスタイルを異にする。お金持ちの旦那衆らの道楽趣味であった俳諧の世界で、俗人一茶がこだわり自ら作り上げて行ったそういった独自の句のスタイルは、おそらく幼少の頃の不幸な経験あるいは郷土の厳しい自然環境によって形成された幼き頃からの反骨精神によるものではないかと感じた。夏目漱石は「芭蕉は自然に行き一茶は人に行く」と評したそうであるが、そういった言語の美しさより心の真を表現した一茶の句に人は心打たれるのだと思う。

最近父親の実家近くに一茶の句碑が突如として立った。

蝉鳴や六月村の炎天寺

炎天寺とは一茶ゆかりの寺で現在東京にあり、今も一茶像を祀っているという。この句碑は一茶を信望する地元の人により立てられたものであるが、地元にはこうした一茶を慕う人が多い。11月19日の一茶の命日には、一茶の菩提寺明専寺で地元の人を集め毎年句会が催されている。小高い丘に立つ一茶記念館から見る黒姫山はひときわその威容を誇り、北信濃の柏原は早くも晩秋の様相を呈していた。

蚕の飼育から考えること

繊維システム工学科　　西岡　孝彦

今年も蚕霊供養の日を何時にするかと考える季節になった。大学を出たばかりのころ液状絹を採取するために蚕を解剖するのを見て「ああ、ざんこくだな」と思ったが、ここ数年私も蚕をかなり劣悪な環境下での飼育を行っている。そのため11月には研究室の全員が集まって蚕霊供養を行っている。学生たちと酒をのむ理由付けなのかも知れないが、多くの蚕を実験に使っているので多少の罪悪感がある為である。

蚕を370ガウスと言うやや高めの磁場内で飼育すると、およそ3分の1の蚕が営繭前に死亡する。死亡した蚕の解剖を行うと繭糸腺あるいは生殖器官に何らかの異常の認められる場合もある。なぜ死亡に至るのかはまだ明確になってはいない。しかし、370ガウスという磁場が蚕にとってかなり劣悪な環境であると言うことが考えられる。営繭まで生き延びた蚕も薄皮で終わるものもあり、さらに営繭を完了した蚕の作る繭の形状は、対照として飼育した蚕の作る繭の形状に比べて歪が観察される。すなわち、幼虫期に受けた劣悪な環境が営繭行動に影響を与えると考えられる。磁場内で死亡する蚕のうち、雄が多数を占める。蚕品種によっては雌、雄の差異無く磁場内飼育で死亡する場合もあるが、顕著な例では磁場内飼育の雄のみが死亡する品種もある。

ところで、最近特に気になることがある。それは、中学生の「いじめ」による自殺や17歳の異様な事件である。すべての事件を知り得る訳では無いけれども、報道によって知り得る範囲で圧倒的に男子の場合が多いのは何故かと考える。蚕の例と人が同じとは言うつもりは無いが、以前から「劣悪な環境」に耐えられるのは男性ではなく女性であると言われていることを思い起こすとわが身を憂うるばかりである。中学から高校という時期の環境がちょうど蚕に与えている370ガウスの磁場に当たっているのだろうか。男子学生のみがその劣悪な環境に耐えられないという現象に見えなくもない。もしそうだとすると現在用意されている小中

高という教育環境は蚕に対する370ガウスのように厳しい環境なのだろうか。実験に使用している370ガウスの磁場がどのような物かというと、その磁束中心にスパナを20から30秒置くと手で持てないほど加熱される。ちょうどIH炊飯器と同様のことが起こっているのである。発熱は、主に誘磁体に渦電流が発生するためと解釈され、生体に対する直接的なエネルギーの伝達は極僅かとされている。しかし、劣悪な環境には違いない。男子学生がその劣悪な環境に耐えきれず、自殺に追い込まれたり、異様と思える事件を引き起こしたりしているのだろうか。その環境に耐えられるのが女子学生と言うことなのだろうか。

蚕の実験の例では営繭を開始すると、磁場の影響を受けない場所に移される。しかし、その場合にも幼虫期に磁場環境で過ごしたという影響が残る。すなわち、対照として飼育した蚕に比べ繭の形状歪を残し、その後の授精率、羽化率は極端に悪化する。幼虫期に磁場内で飼育したという影響が色濃く残るのである。

ところで、中学高校と言う悪い環境？を経た学生たちがその後どのような経過を辿るか少々気がかりなことではある。特に、育児期の女性の異様な行動が報道されることが気にかかることである。ギリシャ神話の時代では母親の子殺しが言われているが、現代でもギリシャ神話そのままなのだろうかそれとも少年期、青年期における劣悪な環境の影響なのだろうか。あるいは、そのような事件の報道機関による過敏な報道によるものだろうか。気にかかることではある。

告知板

ここでは図書館からの最新の情報をお知らせしています。
次号 Library 発行までのお知らせは、Library 号外として構内の掲示板や繊維学部分館ホームページ（http://shinlis2.shinshu-u.ac.jp/seni/）でご案内していますので、そ

⇒ 冬季休業中の特別貸出について

冬季休業に伴い、下記の通り貸出期間を延長します。

貸出開始日	大学院生	平成12年11月24日（金）	10 冊以内
	学部４年生		8 冊以内
	学部２・３年生	平成12年12月 8日（金）	3 冊以内
	研究生・聴講生		
返却期限日	平成13年 1月 9日（火）		

※ 返却期限日は厳守してください。

⇒ 夜間開館の休止と休館日について

12月25日（月）～平成13年1月5日（金）の冬季休業中は、開館時間が短縮されます。

休業中	8：30a.m.～5：00p.m.

休館日は 12月29日（金）～平成13年1月3日（水） です。

※ 業務内容は通常通りです。

⇒ 学術雑誌の製本について

現在、1999年外国雑誌一部を製本のため外注に出しています。製本雑誌リストは、図書館入口の掲示板、繊維学部分館ホームページでお知らせしますので、そちらをご覧ください。
なお、納品予定は11月下旬になります（納品日は多少前後することがあります）。
作業期間中、ご迷惑をお掛けしますがご協力くださいますようお願いします。

分館日誌

（7月～9月）

7/18	第2回図書館運営委員会（SUNS）	出席者－平井分館長、杉本係長
	第2回収書委員会（SUNS）	出席者－松瀬運営委員、杉本係長
7/19	情報リテラシー教育支援実習	出席者－鳴澤
7/31	第1回全学図書館関係係長会議	出席者－杉本係長

次期図書館情報システム詳細仕様打合わせ会

8/21	WG による準備会議	出席者－鳴澤
8/22	ILL、OPAC、他 WWW サービス	出席者－鳴澤
8/23	受入（図書・雑誌・製本）	出席者－鳴澤、大槻
8/28	目録	出席者－宮下
8/29	閲覧、所在管理、システム管理	出席者－鳴澤
9/12	受入（図書・雑誌・製本） 補足	出席者－大槻

8/31	NACSIS-IR 地域利用説明会	出席者－大槻、永井、鳴澤、宮下
9/25	分館長懇談会（SUNS）	出席者－平井分館長
9/28	第2回全学図書館関係係長会議	出席者－杉本係長
9/29	ILL担当者連絡会議	出席者－鳴澤

編集後記

紅葉がとてもきれいな季節になりました。寒さも日を増すごとに厳しくなっていますが風邪などひいていませんでしょうか。

さて、今回の Library は例年と比べるとすこし遅れての発行となりましたが、その分とても読み応えのあるお話を藤本先生と西岡先生に書いて頂きました。お忙しいところ原稿を書いて下さって本当にありがとうございました。この場を借りて御礼申し上げます。

次号は来年1月の発行を予定しています。利用者の皆さんの声も Library に掲載したいと思いますので、ご意見・書評など何でもお寄せ下さい。係員に直接、または E-mail での寄稿もお待ちしています。

E-mail アドレスは、jfg0100@giptc.shinshu-u.ac.jp です。